

【特別展によせて②】

真珠庵伝来の小袖裂打敷 —江戸時代前期の染織資料—

京都国立博物館普及室長 切 畑 健

京都紫野大徳寺の塔頭真珠庵は一休が再興を計画し、一休関係の資料が伝来で特に著名です。ところで、同庵にここにご紹介しようとする近世の染織資料がまとまって伝えられていることは、ごく近年まで知られていませんでした。それらは方丈などで法事が行なわれる時に、香炉、燭台、花瓶のいわゆる三具足を安置する具足机に掛ける打敷で、十二種が現存しています。それらの打敷が貴重な染織資料であることは、一枚をのぞくといずれも近世の小袖などの裂が寄進されて、打敷に仕立てられたもので、それらが見事な意匠、施工によるからであります。そして、さらに注目されることはその数枚には裏面に納進の時期を明らかにする墨書銘が見られることでもあります。この墨書銘はまたこれらの染織品の作期のおおよそをうかがわせます。染織品のみならず、漆工でも陶磁器でも、一般に工芸の分野では作期の明らかな作品はきわめて稀で、そのことが工芸史の研究を遅らせていますが、その意味においてもこの打敷の重要さが知られましょう。

さてその年記は「文亀元年(1501)十二月」の繻珍裂を除き、「元和六年(1620)十月廿一日」(白紅地夕顔胆藤柳文様紋繻裂打敷・写真:

ほかに1点)、「寛永十六年(1639)七月廿一日」(蘇芳地葡萄網干円文様紋繻裂打敷・写真)、「寛政五年(1793)春」で、そのすべてに墨書があるというわけではありませんが、江戸時代前期の、特にその実態のあまりよくわからない時期の年記が三例あることは見落すことはできません。中でも寛永期の染織はいわば研究上、空白の時代でほとんど不明に等しいのですが、その一枚に寛永十六年とあるのは貴重です。これらの墨書銘のある二枚(元和六年、寛永十六年のもの)については、比較的詳しく紹介しました(拙稿「元和、寛永銘小袖裂打敷(真珠庵蔵)について—江戸時代前期の染織資料—」『MUSEUM』376号)ので、ここでは他の二枚について述べることにしましょう。

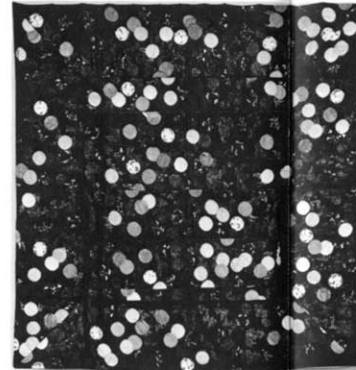
(イ)「紫地円に草花文様紋繻裂打敷」 紗綾形地(さやがたじ)に梅と靈芝を散した文様の綸子。全体を紫地とし、浅葱、萌葱、紅などの鹿子をあらわした円文を絞り抜きます。さらにこの絞染を基本として刺繻と全摺箔を加えます。刺繻は紫の地間に若松や梅、藤、秋草などで、小さな形象ながら、太い糸を用いかなりの速度で繻いすめるような、大胆で大きな気分を与えます。摺箔は現状では剥落が進んで当初の趣を損じていると考え

られますが、秋草や松原、桜樹、土筆などの生えている様子、梅花、棕櫚と秋草などの一単位づつの型を巧みに繰り返して地間を埋めるように処理しています。深い紫に金色はきわめて華奢に輝いたことでしょう。

この打敷には作期をしるばせるような墨書銘はありませんが、たとえば慶長七年(1602)正月吉日の雁金屋「御染地之帳」に「一、下かたすそ、こひ茶、まるをちらし、まるの内、あさきかのご、ひわかのご、御こしなたねいろ、もんは何にてもちらしもん」などとあるのが思い出されますし、あたかも辻が花のような細やかな縫い紋り、小文様ながら大手な繻技、鋭角的な箔文様、そして全体にやや重く暗い雰囲気などは慶長期を中心とした作期を想定させます。

(ロ)「紅地立涌鉄線唐草紋散文様紋繻裂打敷」

やや細い紗綾形地に小梅花を配した綸子。特色のある意匠構成、豪奢に繻いつめた文様と濃厚な色彩に圧倒されましよう。小袖であったところの見事さが想像できます。立涌を黒紅二色に縫い紋り、黒の部分に写生風、意匠風二種の鉄線唐草を繻いあらわします。紅地の筋には丸に卍字紋、三階の松皮菱を白く絞り抜き、さらに金箔のみ



(イ) 紫地円に草花文様紋繻裂打敷

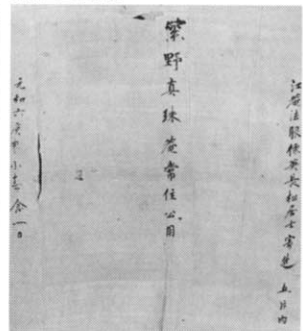
のものも加えて紋連ねとします。それぞれには鹿子の卍字であったり銀泥描の草花に顔料彩色が加えられたりの変化がこらされていて、大胆な構成に繊細な施工が密度の高い感覚を与えます。

ところで、この打敷にも作期をうかがわせる墨書はありません。このすばらしい染織資料が何時頃作成されたものか、不明というだけではあまりにも残念です。そこで考証を試みるわけですが、やはりあまり的確な指摘は期待できません。先ず刺繻に注目することにしました。小さな文様の集合をかなり大手に繻いすめるのは慶長期刺繻の特色といえます。しかし、すでに慶長期の繻針の早さは影をひそめ、丹念な処理がうかがえます。また繻糸の絹ならではの、光沢ある特色を生かそうとする気持がうかがえます。例えば意匠化された鉄線花は雲頭様(うずよう)の花弁の先端がやや盛り上って光ります。意識的に盛りあげて効果的に光らすために下地に何か工夫がこらされているのではないのでしょうか。このような繻糸の光沢への関心は寛文小袖においていっそう顕著であります。しかし、寛文期にまで下げることはこの場合とて

白紅地夕顔胆藤柳文様裂打敷



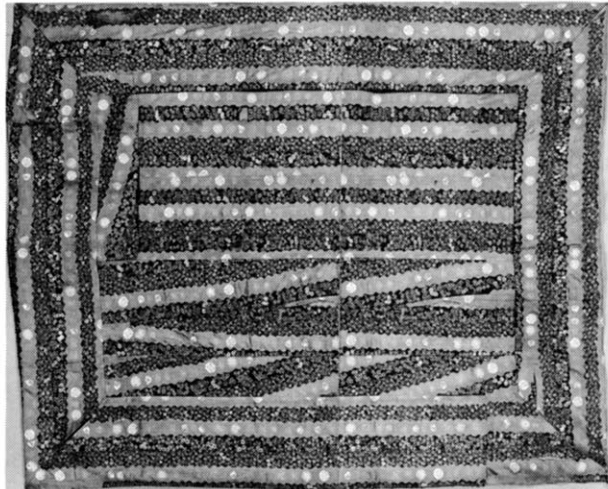
同、墨書銘



蘇芳地葡萄網干円文様裂打敷

同、墨書銘





(口) 紅地立涌鉄線唐草紋散文様絞箔裂打敷

も無理で、したがってその中間の頃、寛永期を中心とする作期が想像されます。またこのはなはだ特色のある構成にも注目せねばなりません。一領を一種の縞のように立涌が並ぶわけですが、きわめて幾何学的で理性的な趣をしめします。こうした感覚は近世絵画の研究ではまさに元和、寛永期の特色であることが指適されています(源豊宗「元和寛永期における幾何学的構図形成」『美術史』50号所収)。他にも雁木形の構成に細やかな刺繍文様が詰められたもの(東京国立博物館蔵の黒綸子地小花鹿紅葉若松文様小袖・写真)、斜縞のいわゆる手綱にやはり小文様が織い詰められたもの(鐘紡株式会社蔵の染分地小花流水鴛鴦文様絞小袖裂具足下着・写真)、格子文様に菊花などをおさめたもの(国立歴史民俗博物館蔵の小袖裂貼付屏風)などがほぼ同感覚の作例としてあげられましょう。先に寛永期は染織史の空白的な時期といいましたが、寛永十六年銘の打敷は桃山時代の辻が花に通じるものをしめしましたし、この一枚は全く対照的に濃厚な趣致を見せるのは興味深いことです。やがて次第にこの時期の染織が明らかにされることでありましょう。

小花鹿紅葉若松文様小袖・部分



小花流水鴛鴦文様小袖裂具足下着



季刊 美のたより No.68

昭和59年 8月23日

発行 大和文華館